様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　1　日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520079
研究課題名（和文）　歴史批判と本文批評：聖書資料説の起源と「批判」概念の発生
研究課題名（英文）　Historical criticism and textual criticism：origin of documentary hypothesis and birth of ‘criticism’
研究代表者
2008～2009　手島　勲矢（TESHIMA ISAIAH）
同志社大学・神学部・教授　　研究者番号：80330140
2010～2011　伊藤　玄吾（ITO GENGO）
同志社大学・言語文化教育研究センター・助教　　研究者番号：70467439

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、19 世紀以降の西欧の聖書研究の歩みを決定づける聖書資料説を可能にした近代的な「批判」概念の発生を実証的に究明するため、17 世紀に出版された二つの先駆的な聖書研究、バルーフ・スピノザの『神学政治論』およびリシャール・シモンの『旧約聖書の批判的歴史』における「歴史批判」と「本文批判」の位置づけを、当時の文脈を十分考慮に入れた上で詳細に分析し、この二つの異なる「批判」意識がいかにして近代の一つの「批判」概念として統合されていくのかを明らかにする試みを行なった。

研究成果の概要（英文）：
This research project tried to examine and clarify, through attentive and critical reading of two major works on the Old Testament written in 17th century, namely Baruf Spinoza’s *Tractatus Theologico-Politicus* and Richard Simon’s *Histoire Critique du Vieux Testament*, the delicate relation between historical criticism and textual criticism in our two eminent precursors of modern biblical studies, in order to trace out the way by which these two criticisms essentially different in nature have been integrated into one and unique concept of criticism in modern scriptural scholarship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：宗教思想史、聖書解釈の歴史

１．研究開始当初の背景

現在の聖書研究者の用いる方法論と歴史研究概念について考察を行なう上で、16 世紀以来プロテスタントとカトリックの学者が聖書テキスト研究（本文批評）において鋭い批判意識を展開してきたこと、また 17 世紀にバルーフ・スピノザが哲学的な宗教批判として聖書研究に歴史批判の概念を導入した

ことの意義について考察することは極めて重要であるが、その過程において、本文批評が主流であったプロテスタント及びカトリックの聖書学者の論争と、スピノザの説く歴史批判の間には問題意識のズレがあること、そしてリシャール・シモンの歴史批判とジャン・アストリュックの聖書資料説の萌芽は、その問題意識の異なる二つの研究系譜の統合として発生したものではないかという仮説を持つに至った。最終的にその分離独立した形で並走の状況で存在する聖書に対する二つの「批判」意識の流れは、アイヒホルンの手によって、「科学」概念のもと、ひとつの「批判」概念として統合され、最終的にはユリウス・ヴェルハウゼンの資料説を生み出すことになるのだが、その二つの異なる問題意識の流れが、どのようにして一つになり得たのか、その資料説の歴史的な背景と方法論的な思想および聖書研究における「批判」概念成立の筋道について深く理解する為に、必要な基礎研究として、本文批評と歴史批判の緊張関係の問題を取りあげようというのがこの研究当初の背景であった。

２．研究の目的

本研究は、聖書資料説を可能にした近代的「批判」概念・思想の発生を実証的に究明するものあるが、そのためにはバルーフ・スピノザ『神学政治論』*Tractatus Theologico-Politicus* (1670:TTP)とリシャール・シモンの著作『旧約聖書の批判的歴史』*Histoire critique du Vieux Testament* (1678:HCVT)における歴史批判と本文批評の位置付けが重要になる。そのためには、両者の共有している１７世紀以前の聖書研究—特にユダヤ側とキリスト教側の区別、プロテスタント側とカトリック側の区別に留意しながら—整理していくことが大切になる。とりわけリシャール・シモンの HCVT には 17 世紀以前のキリスト教徒の学者のみならず、ユダヤ教側の学者の議論も多数引用される。従って HCVT 全 3 巻に登場する学者のリストを作成し、リシャール・シモンの聖書研究の背景とスピノザの聖書研究の背景の比較を可能にする土台を築くことが重要となる。これによってスピノザがリシャール・シモンに及ぼした影響についてもより詳しく理解することが可能になり、そしてシモンの理解する歴史批判と本文批評の関わりの総括的な整理も可能になる。一方もう一つの重要な目標として、スピノザの歴史批判における本文批評の位置付けがある。実はスピノザが当時プロテスタントとカトリックの間でなされていた聖書テクストをめぐる論争についてどの程度の知識を持っていたのかについて明らかではない。これについては 15、16 世紀の学問状況の把握が、スピノザの TTP の精読を助けてくれることになろう。

本研究の内容は、ある意味聖書研究の歴史の細部に関わることであるが、聖書研究における本文批評と歴史批判の関係の問題は、19 世紀の西洋古典学のあり方を考える上で、また「古典学」が「科学」Wissenschaft として成立していく過程を理解するうえで極めて重要な問題である。現在のところ、聖書研究者の側には、自己の歴史批判の諸前提を相対化し、さらに高度な歴史批判の方法論を構築しようという欲求や、本格的な思想史として聖書研究の歴史を哲学的に分析して捉えようという試みはあまりみられない。まれに聖書解釈の歴史が書かれることがあっても、もっぱらキリスト教思想史の枠組みの中に、または旧約聖書学の枠組みにとどまるか、もしくは 17 世紀から 19 世紀にかけての哲学史や思想史や科学史の大枠で、漠然とした記述に終わる場合が多い。本研究が行なうのは、本文批評の問題を取り上げることで、近代に起こった聖書資料説という具体例において「科学」や「批判」概念を相対化する試みでもある。つまり近代聖書研究が生み出した聖書資料説は恣意的な聖書テキスト再構築と密接につながっていることが、この研究によって明らかになる。近代ユダヤ学者が、キリスト教学者の主導する近代聖書研究の「科学」概念に疑問を呈してきたことを考慮すると、ある意味、このように根源的に近代キリスト教の産物＝聖書資料説の科学性批判の試みは、キリスト教近代の偏向性にせまることであり、キリスト教徒とユダヤ教の文化的な緊張を感ぜずに思考することを可能にする日本でしか行えない試みともいえる。

またこの研究を通して、本文批評と歴史批評は表裏一体であり、矛盾の関係にあることが例証され、その二つを一つの「批判」概念へと統合することを恣意的におこなった 19 世紀の「科学」概念が間接的に批判されることになり、その結果、欧米によく見られるタイプの、キリスト教研究とユダヤ教研究の垣根を意識せざるをえないような聖書研究を相対化する努力を通して、近代思想の根幹である「科学」、「批判」概念に新たな論争の場が用意されることとなり、また哲学と宗教学という学問領域の狭間で不明な「古典学」概念の位置と価値についての再考を行うことにもつながるものであろう。

３．研究の方法

聖書資料説の近代的「批判」概念の発生を、歴史批判と本文批評の関係から分析するために、本研究は、まずスピノザと聖書本文研究の関係を一方で明らかにし、他方リシャール・シモンによるスピノザの歴史批判の受容の実態を突き止め、歴史批判と本文批評という二つの異なる「批判」意識が一つの「批判」概念・思想となっていくのかのプロセス、そこにどのような理論的・思想的障害があり、どのように次第に克服されていくのか、その過程を明らかにする。そこでは TTP と TTP 以前、TTP と HCVT、そして HCVT と HTCV 以後という三つの比較研究のサブカテゴリーを意識している。

第一段階として、スピノザの TTP9 章の後半を中心に精読し、スピノザの本文批評に対する理解と、彼の求める歴史批判との関連性を明らかにする。そのために、16 世紀から 17 世紀にかけての聖書の本文批評の展開として、１）ヘブライ語母音記号の問題、すなわちルイ・カペル（1585—1658）とヨハンネス・ブクストルフ父（1564－1629）の間の母音記号の起源をめぐる論争についての整理、2)サマリア五書問題（多言語聖書、ジャン・モラン）、3）その他スピノザの同時代の哲学系の人物（ホッブズ、ラ・ペレール、マイエル等）による正典批判の基礎調査を行う。そして、スピノザと当時の聖書研究（特に聖書研究）との関係の状況把握につとめながら、スピノザの本文批評に対する評価を明らかにし、その歴史批判と本文批判の関係、および近代の聖書資料説に現れる本文批評の具体的な諸問題を一つの概念・思想として捉える。

第二段階として、シモンの HCVT 第一部を精読する。この第一部は聖書のテキストの成立の経緯についてのシモンの歴史理解が示されるので、スピノサが理解する聖書成立との比較の上で一番重要な部分である。スピノサの TTP がシモンの仕事に実際どれぐらい影響を与えているのかを見極めるのには実は慎重な作業が要求される。一見その影響は明白なようでいて、実はシモンが TTP を手にした時には既に HCVT はほぼ完成していたとする見解もある（Paul Auvray）。ここでは HCVT のフランス語諸版、その英訳、さらにラテン語訳テキストのデジタル化を行い、それをベースに諸版の間の徹底的な比較を行いつつテキスト精読と分析を進め、TTP との関連性を調査する。それと共に、第一部に登場する聖書学者、ヘブライ学者のリストアップを行い、それぞれの主張と宗教的背景をまとめた学者一覧を作成する。その際、フランスを中心としたヨーロッパの諸図書館において資料収集を行う。

第三段階として、シモンの HCVT 第二部を精読する。この第二部では聖書原典と古代の諸翻訳の問題を扱われている。この段階において、イスラエルのマソラ研究者また写本研究者（アハロン・ドタン、アレクサンダー・ロフェ）との意見交換や資料収集を行う。とりわけシモンも取りあげているサマリア五書とギリシア語聖書とヘブライ語聖書の関係をどのように現在の聖書学は評価するのかについての最新の知見を求める（アレクサンダー・ロフェ、エマニュエル・トーヴ氏）。また母音記号とマソラ研究で世界をリードするイスラエルの研究者（アハロン・ドタン氏他）から、母音記号の問題を現在どのように評価するのか、最新の研究状況の知見を求め、シモンの仕事との関連を考察する。

本研究の第四段階—最終段階として、HCVT の第三部の精読と分析が行われる。第三部の内容は聖書テクストの翻訳と理解をめぐるカトリックとプロテスタントの論争が多くを占めるが、この論争の中にこそ歴史批判と本文批評の関係を考える鍵があると思われる。もちろん、それは聖書解釈の方法論の問題に止まらず、神学、教会史など、多方面の理解に関係する可能性があるが、ここではあくまでも歴史批判と本文批評の関係性に焦点を絞り、最終的にスピノザの歴史批判と 16 世紀以降の本文批評の関係と、シモンの中で行なわれたと見る本文批評と歴史批判の融合のプロセスを記述し、そこに現れる聖書資料説を可能にする新しい「批判」意識の成立を明らかにする。

４．研究成果

まず、2008 年、2009 年度の研究代表者であった手島が上記の第一段階の大部分、第二段階および第三段階の一部、2010 年度から手島と交代して代表者となった伊藤が、第二段階および第三、第四段階について引き継いで研究を進め、以下のような成果を得た。まず、スピノサの本文批評に対する評価と歴史批評の関係についてであるが、TTP 第 9 章の分析から見えてきたこととして、同時代のプロテスタントやカトリックの聖書学者たちが、聖書の「オリジナル」を追求し復元するために、マソラの欄外註と本文の読みの違いを、「どちらの読みが本当であるか」という真偽問題として捉え、激しい論争を繰り返したのとは対照的に、スピノザは本文の異読の問題について、それらの異読がなぜ発生しえ

たか、そしてそれらの異読がなぜ保護されて伝えられてきたのか、その原因・由来・存在意義は何かといった疑問へ向かい、冷静に異読の多様性そのものを理解しようとする姿勢が顕著である。スピノザは聖書の歴史批判の立場に立つにしても、その基本的関心は、聖書本文そのもののオリジナル性よりも、聖書の根本的な教説の把握にあり、その啓示のオリジナル性の理解の根幹を揺るがすような異読は存在しないという確信に到達することこそが最も重要であり、その確信がある以上、真偽問題としてマソラの異読問題に取り組むことには意義を感じないのである。そしてそれは彼が聖書の成立過程を調査し、その上で到達した彼の歴史的知見を踏まえた学的な要求であると考えられる。また、聖書テキストは「読まれるもの」として母音や文節の切り方の情報を含む発話の伝承を抜きには機能しないという伝統的なユダヤ人の認識をスピノザはもっていたと思われ、そうした発話（口伝）を無視して、その文字のオリジナルの復元に努めるプロテスタントやカトリック学者のアプローチに違和感をもっていたことは明らかである。そうしたスピノザにとってはヘブライ語文法こそが聖書の歴史に不可欠な情報であったと考えられる。というのも預言者の啓示はヘブライ語という人間の言語で記録され、人間の言語こそ、自然の歴史と最も密接な関係において合致するものと理解されねばならないからである。よってスピノザのラディカルな歴史批判意識はヘブライ語文法理解のうちに顕著に認められるべきと考えられる（より詳しくは本研究成果の一部である手島勲矢『ユダヤの聖書解釈—スピノザと歴史批判の展開』岩波書店、2009 年を参照）

第二段階については、リシャール・シモンの HCVT の精読を行い、特に第一部に登場する聖書学者、ヘブライ学者たちの整理を行う中で、重要な成果としてはシモンの ECRIVAIN PUBLIC（PUBLIC WRITER）説の出自が 16 世紀初頭のユダヤ人学者アヴァルバネルのサムエル記注解にあるということを突き止めたことである。この発見はスピノザの聖書解釈が資料説とは異なる方向性をとっていたことの独自性が、いよいよ重大な特徴として注目される必要があることを示唆している。なぜなら、スピノザは多分アヴァルバネルを知っていたと思われるからである。当初、キリスト教起源の歴史批判として資料説の問題を考えていた我々にとって、リシャール・シモンがアヴァルバネルの注解に学んだ発想という可能性は、今までの研究上の見込みを大きく見直す必要性のあることも示唆するものであり、初期の計画で考えていたよりも更に深く 15・16 世紀の聖書学者、ヘブライ学者について調べることを要求するものであった。とくにアヴァルバネル自体の聖書注解に歴史批判の度合いを見定めることが重要と思われた。さらにリシャール・シモンが HCVT を執筆する上で参照した聖書学者、その著作群の数は膨大であるが、とりわけ彼が如何なるユダヤ人学者たちの著作を参照していたか、いかなる写本を手にしていたかを、シモンの属していたパリのオラトリオ会図書館の目録やシモン自身の蔵書、研究ノートを辿りながら整理していく作業も試みた。ただ、現在それらの一部がフランス国立図書館そしてルーアン市立図書館に保存されているが、大部分はシモンの死後、紛失または焼却されてしまっており、復元が難しいものも多いことが確認された。

第三段階については、主に手島が担当予定であったため、代表者変更により、当初の予定であった、イスラエルの学者との意見交換や資料収集は十分に行なうことができず、今後の課題として残ることになったが、一方で HCVT の第二部の精読を進めていき、その中で、リシャール・シモンが HCVT をめぐって 17 世紀のカトリックおよびプロテスタント両陣営から厳しい批判にさらされたことで、本文批評および歴史批評についての彼の考えを率直に開陳することが困難になり、偽名を使って自説の擁護および他の学者の論駁を行ったりする機会が多くなったこともあり、シモンの立場を見極めるためには、やはり彼の伝記的側面を徹底的に調査し、まとめてみることが必要であると強く感じるようになった。Paul Auvray および Jean Steinmann による重要な伝記的研究、およびシモン自身の著作や書簡などを参照し、HCVT が書きあげられた文脈をより明らかにするため、リシャール・シモンの東洋語学者、聖書学者としての道のりを比較的詳しい評伝の形でまとめる試みを始めた。完成に至るまではもう少し時間が必要であり、フランス本国での追加の資料収集が必要となるが、これがまとまれば、少なくとも国内においてリシャール・シモンについての初めての本格的紹介となり、聖書解釈史および古典文献学史を研究する人々にとって有用な資料となろう。

第四段階として、聖書テクストの翻訳と理解をめぐるカトリックとプロテスタントの論争が多くを占める HCVT の第三部の精読と分析が行われたが、歴史批判と本文批評の

関係性に焦点を絞ろうとしつつも、シモン自体が、プロテスタントとの論争や同じカトリック陣営の中の敵であったポール・ロワイヤルのアルノーや王の側近でフランス教会の最有力者であったボシュエとの論争に翻弄され、その中で我々の視点からは必ずしも首尾一貫しているとは言い難い議論を展開しているため、様々な宗教論争に明け暮れた 17 世紀のフランス宗教界における本文批評、歴史批判をめぐる幾つかの論争の流れを踏まえ、その中でのシモンの立ち位置を慎重に見極めたうえでないと、シモンの議論の真意を測りがたいケースが実に多い（特にシモンの晩年に出版される *Bibliothèque critique* や *Lettres choisies* などの重要な情報源において）ことが明らかになった。特に HCVT をフランスにおいて発禁処分にしただけでなく、シモンのその後のすべての著作の出版に対して眼を光らせ、「批評」精神を押さえこもうとしていたボシュエの著作との関係を考えることは、シモンが目指していたものをより正確に捉えるために必要であることを強く認識するに至った（この問題については伊藤玄吾「リシャール・シモンとボシュエ（1）『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分に至るまで」、『言語文化』、2012 年、pp.313-351 参照）。

最終的にスピノザの歴史批判と 16 世紀以降の本文批評の関係について明らかにする作業は一定の成果を見たが、一方でシモンの中で行なわれたとされる本文批評と歴史批判の融合のプロセスを記述する作業においては、上述の如く当初想定していたよりもはるかに複雑な状況を説きほぐしながら進める必要があることが認識され、現在も作業は進行中であるが、現在まで集めた諸資料を通してリシャール・シモンという学者の姿がより明確な像を結びつつあり、近代の聖書資料説を可能にする新しい「批判」意識の成立を明らかにするための基盤がよりよく見えてきつつあると言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. 手島勲矢、「スピノザの聖書解釈の特異性について—16･17世紀クリスチャン･ヘブライストとの関係で」、スピノザーナ、査読無、9号、2008、pp.83-90.
2. 手島勲矢、「「タナッハ」の構造分析と高等批評の「ユダヤ教」理解」、旧約学研究、査読無、6号、2009、pp.25-46.
3. Gengo Ito, « Antiquité et le progès de la métrique dans les traductions « érudites » des psaumes au XVIe siècle », *Traduction et Critique*, Actes du Colloque internationl pour commémorer le 500ème anniversaire de la naissance d'Etienne Dolet(1509-1546), 査読無、2009, pp.189-201.
4. 伊藤玄吾、「フランスの初期人文主義者たちとユダヤ研究—ギリシア語研究とヘブライ語研究の“危険な関係”」、京都ユダヤ思想、査読無、創刊準備号、2010、pp.62-69.
5. 伊藤玄吾、「西欧における「古典」」、高等研報告書 1102　近代精神と古典解釈－伝統の崩壊と再構築－、査読無、2012、pp.22-32.
6. 伊藤玄吾、「フィリップ・メランヒトンによるヘシオドス『仕事と日』注解——宗教改革時代の古典解釈の一断面」、高等研報告書 1102　近代精神と古典解釈－伝統の崩壊と再構築－、査読無、2012、pp.238-255.
7. 伊藤玄吾、「リシャール・シモンとボシュエ（1）『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分に至るまで」言語文化、査読有、第 14 巻第 4、2012、pp.313-351.

〔学会発表〕（計 4 件）

1. 伊藤玄吾、「フランスの初期人文主義者たちとユダヤ研究—ギリシア語研究とヘブライ語研究の“危険な関係”」、京都ユダヤ思想学会、2008 年 6 月 7 日、同志社大学
2. 手島勲矢、「タナッハの構造分析と高等批評のユダヤ教観」、日本旧約学会、2008 年 10 月 27 日、日本聖書神学校
3. 手島勲矢、「二種類の名前について：聖書解釈から考えるユダヤ思想の特性」、京都ユダヤ思想学会、2009 年 5 月 31 日、同志社大学
4. 伊藤玄吾、「詩篇、韻律、ハルモニア—詩としての聖典の解釈をめぐって」、京都ユダヤ思想学会：エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』刊行 50 周年記念シンポジウム「レヴィナス哲学とユダヤ思想」、2011 年 12 月 16 日、京都大学

〔図書〕（計 2 件）

1. 手島勲矢他、『ユダヤ人と国民国家：政教分離を再考する』、岩波書店、2008、71－111.
2. 手島勲矢『ユダヤの聖書解釈—スピノザ

と歴史批判の転回』、岩波書店、2009、375.

６．研究組織
(1)研究代表者
2008～2009
手島勲矢（TESHIMA ISAIAH）
同志社大学・神学部・教授
研究者番号：80330140

2010～2011
伊藤玄吾（ITO GENGO）
同志社大学・言語文化教育研究センター・助教
研究者番号：70467439

(2)研究分担者
2008～2009
伊藤玄吾（ITO GENGO）
同志社大学・言語文化教育研究センター・助教
研究者番号：70467439